社会の変化を見据えた変革先進県の取り組みに見る、「これから」の学校像

新型コロナウイルスの感染拡大と全国的な臨時休業は、私たちは既に「予測困難な時代」を生きていることを実感させた。この事態を教育改革に先進的に取り組む自治体はどう捉え、学校はどのような対応を行ったのだろうか。

トップインタビュー

学校と授業のあり方をタイムマシーンに乗って考えてみる

広島県教育委員会 教育長 平川理恵

将来の変化を予測することが困難な時代を生きる上で必要な資質・能力を生徒に育む学校とは、どのような場なのだろうか。主体的な学びを促す教育改革に取り組んできた広島県の平川理恵教育長に、臨時休業下での気づきを踏まえて話を聞いた。

臨時休業によって進んだ未来に向けた学びの変革

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業は、私たちに「これからの学校教育はどうあるべきか」を考えさせるものでした。

今回の事態が起きるまでは、同じ年齢の生徒が同じ教室に集まり、教師からの様々な働きかけを通じて学ぶ場、それが学校でした。しかし、臨時休業によって、私たちはそのような場を維持することが難しい状況に追い込まれました。そこで広島県は、Googleの教育支援クラウドサービス「G Suite for Education」を導入し、県内の児童・生徒全員分に相当する約30万人分のアカウントを確保し、オンライン上に仮想の学校・教室をつくれるようにしました（P.20～21で広島県立広島国泰寺（こくたいじ）高校の実践を紹介）。

とは言え、これまで学校で行っていた教育をそのままオンライン上で展開しようとしているわけではありません。目指すのは、生徒中心の学びの場をつくることです。そのためには、例えば、生徒が自己開示しやすいように、安心・安全な場をつくることの必要性を、これまで以上に教師が意識することが重要です。

そもそも、登校して画一的な授業を聞くという学校教育のスタイルは、工業社会に標準を合わせたものでした。大学入試が、記憶した知識や解法パターンの再生に重きを置い

ひらかわ・りえ
2010年、公募により、公立中学校民間人校長として横浜市立市ヶ尾中学校に着任。文部科学省中央教育審議会特別部会委員などを歴任。18年4月から広島県教育長に就任。著書に『クリエイティブな校長になろう――新学習指導要領を実現する校長のマネジメント』（教育開発研究所）など。

てきたのもそのためです。しかし、技術革新によって、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会、Society 5.0の時代を迎え、学校教育は、生徒が自分の興味・関心を軸に、学校の中だけでなく、地域や企業などともつながりながら、意欲的に学びを深める場へと変わることが求められています。

広島県では、2014年12月に策定した「広島版『学びの変革』アクション・プラン」に基づき、生涯にわたって主体的に学び続け、多様な人々と協働して新たな価値を創造できる人材の育成を目指した教育を進めてきました。学びたいこと、やりたいことを自覚した生徒が、教室においてだけでなく、いつでもどこでも個別最適化された教育を受けられるようにすることで、自分の将来を切り拓く資質・能力が育まれる……私たちはそんな学びを実現しようとしていたのですが、臨時休業によってそれが加速していったわけです。

人とのかかわりの中で学びを深める学校を創る

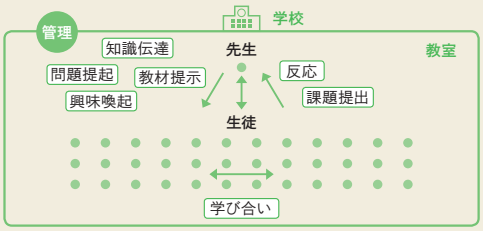
「学びの変革」を実現する上で重要になるのが、「本質的な問い」を通じて資質・能力を育む授業です。例えば、20年4月から、4つの県立商業高校でスタートした「ビジネス探究」では、1年生は毎週4コマ連続で、「生きるとは」といった本質的な問いに向き合います。最初は考えがまとまらない生徒も、これまでの人生を振り返り、仲間と語り合う中で、生きることの意味や学びの目的を言葉にできるようになります。

そうした、一人ひとりの生徒が本質的な問いに向き合いながら、教科の知識・技能を含む資質・能力を身につける授業は県全体で展開していくべきものです。そこで6月から、全指導主事を対象に各教科・科目における本質的な問いの立て方と、ルーブリックに基づいた評価の方法に関する研修をオンライン上で実施しています。また、19年4月には、「学びの変革」を先進的に実践する広島県立広島叡智（えいち）学園中学校・高校が開校しており（P.18～19で紹介）、今後、同校での取り組みの成果を共有しながら、県全体で新学習指導要領で目指す教育を実現していきます。

私たち大人に必要なのは、タイムマシーンに乗る勇気です。未来の社会を想像し、そこで幸せに生きるために、学校は子どもたちに対して何をすべきかを考えてみるのです。私たちは、自分の知っている古い社会を前提に、「子どもは、学校は、こうあらねばならない」と決めつけることはもうやめて、自校の生徒がこれからの社会を生きていく上で必要な資質・能力とは何か、その育成のためにはどのような学びが必要なのかを本気で考えるべきです。

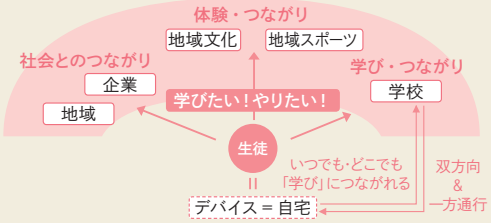
オンライン授業の広まりなど、学校の物理的なあり方は今後大きく変わっていくでしょう。しかし、学校そのものがなくなることはないはずです。なぜなら、新学習指導要領で目指す未来の学校は、人とのかかわりの中で学びを広げ、深める場だからです。そして、学校において、これからますます大切になるのは、生徒の学びの意欲を高め、多様な人と結びつけていく先生方の授業力だと思います。

これまでの学校教育のイメージ



これまでの学校教育は、生徒が物理的に学校に来て、教室に入って初めて学びが成立した。また、知識の伝達や問題提起といった学びのアクションは、教師が起点であることが多かった。

これからの学びのイメージ



これからの学校教育は、生徒一人ひとりの「これを学びたい」「これをしたい」という思いが起点となり、学校内外の場や人が結びつきながら展開されていく。学びの場も、従来の教室という場にとどまらなくなる。

※ ICT toolbox（https://ict-toolbox.com/）提供資料を基に編集部で作成。